

吉田寮の厨房は料理を作るところではありません。音楽をつくるところです。

オガサハラオ

吉田寮のパンフを見ているみなさんこんにちは。吉田寮の厨房でドラムをたたいてる人のひとりです。

はて。「厨房でドラムをたたく」とな。一見非常識なこのフレーズ。いや、吉田寮以外では実際非常識であり、実は当たり前なんだ、ということを示す「一見」という言葉がおかしい。アランデュカスの厨房でドラムをたたくことが出来る、という話があったら是非見に行きたいですが（そういえばガケ書房のギターも「うるさいから」という至極当たり前な理由で撤去されちゃいましたね）それはともかく。あくまで吉田寮限定のことである、ということまで話を進めます。

ではなぜ料理を作る場所としての厨房が現在のようにスタジオとして機能するようになったか、という成立過程/経緯は、「食残Cについて」に説明があるのでここでは繰り返しません（あれー）。ここで言っておきたいのは、便宜上ページや組織は分かれてはいるものの、食堂（使用者）と厨房（使用者）は、ハード面・ソフト面において運命共同体だ、ということなのです。

これだけではなんなので補足すると、食堂を含む吉田寮の敷地の地主である京都大学が、寮の立替えを（現在進行形で）主張しています。大学の方針の中には、食堂（もちろんそのなかには厨房も含まれています）の取り壊しも含まれていたことから、厨房使用者も食堂の保存を主張するため、吉田寮と大学の交渉に参加しています。さらに、月一回の厨房使用者会議で交渉の動向を情報共有したり、吉田寮の保全のための土木作業やら掃除に参加しています。

なんかしんどそうでしょ？ほかのサークルに比べてどうかといわれると困っちゃいますが。

まあ、「めんどくせー」と（すくなくとも筆者は）内心思いながらも、負担を分散しつつ（最近小委員会をいくつか作って担当を振り分けました）、厨房使用者はこの場へのコミットをつづけているわけです。上にあげたようなこと全てをしなければならぬわけではありません。安心なされよ。

ちなみに。さもわかったかのようにこの文を書いているワタクシ。は、吉田寮生ではございませんで、つまり寮に住んでおりません。何がいたいかというと、寮の入選パンフに半ばおまけのように非住人が文章を乗っけてる、という事実が吉田寮というコミュニティの解放性を物語っているわけでありまして。それもこれも、厨房＝スタジオという、寮生と非寮生が交じり合う汽水域があるからなのです。